

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

精神科急性期デイケア：イルボスコにおける試み

武士 清昭¹⁾，羽田 舞子¹⁾，東儀 奈生¹⁾，柴 友美²⁾，水野 雅文¹⁾

1) 東邦大学医学部精神神経学講座，2) 東邦大学医療センター大森病院看護部

早期精神病 (early psychosis) に対して，DUP (Duration of Untreated Psychosis：精神病未治療期間) の短縮と治療臨界期における集中的な治療が有効でありかつその転帰を良好に向ける上でも重要であることに関しては，これまでに数々の報告がなされてきた。近年早期介入への関心が高まり，諸外国ではそれに特化した治療ユニットなど社会資源の整備が進められているが，本邦においては例を見ない。上記の背景から東邦大学医療センター大森病院精神神経科 (メンタルヘルスセンター) では発症危険状態 (at risk mental state：ARMS) や統合失調症の初回エピソードの患者に対し急性期治療を行う早期精神病ユニット (EPU) を2007年5月に大規模認可のデイケアとして開設し，スティグマを避け若者に受け入れられやすい治療施設とするべく「イルボス

コ (イタリア語で森の意)」と命名した。対象者は年齢15～30歳で，スタッフは担当医 (精神科医)，臨床心理士，看護師，精神保健福祉士，作業療法士各1名。インテンシブなりハビリテーションを目的とするため利用期間を1年間に設定している。プログラムの開発やスタッフの関わりは，Falloonらが検討を重ねてきたOptimal Treatment Project (OTP) をモデルとし，特にプログラムについては認知機能障害の改善を促すことと，若者が飽きずに継続できる内容とするように配慮している。思春期や青年期に特化した施設にすることで，出席率の向上だけでなく社会機能の向上や社会復帰が可能となったケースも複数あり，デイケアの機能分化の必要性にも言及していきたい。

(この論文は抄録集より転載しました)